

名にし負わば

—ルグバラの人びとの名づけから思うこと—

山崎 暢子*

はじめに

見知らぬ人ばかりの土地で誰かと顔なじみになるまで毎日が自己紹介の連続になるというのは珍しくないと思う。会うひとと会うひとに私は日本という国からやってきた学生であり、この地域の文化や言語を学びに来ているのだとひととおりに説明する。そしていざ名乗ると、かなりの頻度でげん顔をされた。私の「Nobuko」という名前がおぼえにくいとのこと。どうやって発音していいのかわからない、とか、むずかしい名前ね、とか言われたりする。それからたいていふたこと目には、次のような質問が飛んでくるのだ。―「あなたはクリスチャンかムスリムか、あるいはヒンドゥー、それとも…」。つまり、信仰を表明する名前をもっていかるべきだという意識が相手にはあり、私の日本語名だけでは信仰を判別できないというのだろう。私の「奇妙な」名前に対してなんであれ興味をもってくれた人からは「あなたの

名前にはどんな意味があるのか」と尋ねられることもあった。そんなとき私が口にするのは、名前に込められた意味、「この子がこうあってほしい」といった親の願いであり、がいて「良い」意味についての説明であった。これは、サハラ以南アフリカでひろくみられる名づけとはずいぶん様子が違っているようなのだ [梶 1985; 木村 1996; 小森 1999; Sugawara 2016]。

地域概要

私が訪ねて行ったのは、東アフリカのウガンダ共和国北西部で「ウェスト・ナイル」とも呼ばれる地域であり、¹⁾ 行政的には9つ(2017年8月時点)の県が含まれる。この地域は、北を南スーダン共和国(以下、南スーダンと記す)、西をコンゴ民主共和国(以下、DRCと記す)と国境を接していて、日用品や農産物を売買する行商の通り道になっているため大小さまざまな市場が点在する。ア

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 筆者は、2016年7月から2017年1月にウガンダ共和国で調査をおこなった。本稿の内容はおもにこの期間に得られた情報に基づいている。本稿に登場する人の名前の解釈については、あくまで現地の人の日常レベルの理解についての聞き取りをおこなっており、筆者自身の分析は言語学的に不十分な点が多い。また、忌避名やあだ名、双子につけられる名前などについては、今後の課題である。

ルア県を中心として、多くの住民がルグバラ (Lugbara) という民族集団の出自であり、DRC 北東部や南スーダン南西部に親族がいる人も多い。ウガンダ国内のルグバラ人口は110万人とされる [UBOS 2014: 20].²⁾

主たる生業は農業である。地域差はあるが、キャッサバ (*gbanda*) やソルガム (*ondu*) がほぼ全域で栽培されている。年間降水量は約1,250 mmで、10月おわりから2月はじめにかけて乾期をむかえる。この地域では、食事のソースに用いる「葉物」の種類が多く、カボチャの葉を用いたり、DRCの国境近くだとキャッサバの葉をヤシ油で炊いた料理が供されたりすることもある。とくに印象的だったのは、大きさ20センチほど、ときにはそれ以上にもなるアボカドの熟れた果実1つがたった200~300ウガンダ・シリング³⁾だったことだ。また、ウガンダ国内有数の蜂蜜の産地であるほか、近年はヨーロッパなどでの需要の高まりからチア・シードの栽培が一部地域で試験的に始められている。

交易に携わる人をはじめ、教育を受けるために多様な民族の人びとが国内外からこの地域に出入りしている。近隣には、マディ (Ma'di) やカクワ (Kakwa), アルル (Alur) などの民族集団の人びとが暮らしており、民族をこえた通婚はよくみられる。また現

在、内戦状態の南スーダンからウガンダへは新たにおよそ52万人が避難してきており [UNHCR 2016: 8], 「ウェスト・ナイル」では5つの県に難民定住地が開設され、医療や教育支援などさまざまな人道機関も活動している。⁴⁾

その名前がうまれるまで

さて、ルグバラ社会における子の名づけは、産みの母によっておこなわれることが多い [Middleton 1961]。私が今回の調査中に集めたわずか100名弱の名前をみても、母が名づけた事例が多かった。Dalfovo [1982] がいうように、ある名前が示す字義どおりの意味のほかに、名づけた当人をとりまく具体的な出来事を指す意味があり、後者に込められたメッセージは実際に話を聞いてみないことには分からない。

マラチャ県に暮らすルグバラ農家の事例をとりあげてみよう。世帯主は40代男性 (Aさん) で、第一夫人 (Bさん) とのあいだに7人、第二夫人 (Cさん) とのあいだに4人の子どもがいる。

とりわけ際立っていたのが、Cさんの第三子の「Polisimuke」⁵⁾ という名前だ。Polisiは「警察官、警察署」を意味する名詞、mukeは「良い、妥当な」という意味の形容詞⁶⁾

2) ルグバラ語は、ナイル=サハラ語族のうち中央スーダン諸語に属す。ただし、同じ「ルグバラ」といっても地域によって単語レベルで異なる「方言」があり、私が「ルグバラ語を学びたい」と口にしようものなら、「どのルグバラ語のことを言っているのか」「あなたのルグバラ語の先生はどここのルグバラだい」と問われることが度々あった。

3) 3,500シリング≒1米ドル≒102円 (2016年9月時点)。

4) 筆者は「ウェスト・ナイル」地域で、2014年と2016年に難民やその支援機関の職員、そして難民を受け入れている地域住民について調査をおこなった。

5) 英語の police から派生した名詞。

で、字義どおりには「良い警察」となる。命名の由来は以下のようなものである。CさんはAさんと結婚する前に、すでに別の男性と結婚しており、その夫は彼女の親族に対して婚資の支払いをすべて終えていた。本来ならばその夫のもとを彼女が去るというのは社会的に好ましくないことだが、彼とのあいだで長年、子宝に恵まれなかったのだという。そこで彼女は秘密裏に別の男性、つまり現在の夫であるAさんと逢瀬を重ねるようになった。あるとき、ことの次第が発覚してしまい、AさんとCさんは、Cさんの前夫とともに警察に呼び出された。事情を聞いたうえで警察はCさんに、夫のもとを離れてAさんのところに行くのが良いだろうと告げたという。ただし、彼女は手放して喜んだわけではなかった。彼女は第一子を「まさか、願ってもいなかった、奇跡のようだ」という意味の「Taliru (*tali*=miracle (名詞), *-ru*=like (接尾辞) → like a miracle)。または, *taliru*=milaculous (形容詞⁷⁾)」と名づけている。この名前には、前夫のもとを離れたとはいえ、「またしても妊娠できなかつたらどうしよう」「やはりダメなのではないか」という彼女の不安と、今度こそはとの期待とが入り混じった感情が込められている。第二子には「Wa'diko (*wa'di*=relativeあるいは

kinship, *ko*=no → no relative)」という名がつけられているのだが、これは、Taliruを授かったのはまさに奇跡であって、「もうそれ以降は望めないかもしれない」「生まれてきてもすぐに死んでしまうかもしれない」と彼女が不安になりはじめていたことによるという。第三子を出産してようやく、彼女の強い不安は緩和され、「あのときの警察の判断は正しかった」のだと確信に至り、Cさんはその子をPolisimukeと命名したのだった。

名づけの今むかし、そしてこれから

ところで、調査を手伝ってくれていた青年にあるとき、「日本の名前を僕にもなにかつけて」とせがまれた。「う～ん。きみにぴったりの名前？」私は日本の名前をぼつぼつと思い出してみるが、どの名前も人物と対になってしまっていて、そのどれもがしっくりこない。かといって、てきとうな名前もつけられない。「いいのが見つかったら、今度つけてあげよう」と私は返す。「なんでもいいんだけど、何かないの、いまパッと思いつくの」と彼は笑いながら「約束だよ」と念を押す。さらにつづけて「そういや僕のルグバラの名前の意味、知ってる？…『侮辱』だぜ」と言うので、私は尋ねる。「それは、あなたのお母さんがつけたの、それともお父さん？」

6) 同形で名詞になることもある。

7) ルグバラの名前では、接尾辞として女性名には「-ru」が、男性名には「-a」をつけることが多い。このTaliruという名前が形容詞 *taliru* (=miraculous) 一語なのか、あるいは、名詞 *tali* のあとに接尾辞 *-ru* がついたものなのかについては確認できていない。後述する Ayikoru という名前についても、名詞 *ayiko* (=happiness, joy) と接尾辞 *-ru* に分けることもできるが、*ayikoru* (=happy, joyful) という形容詞も存在する。この Ayikoru と Taliru はいずれも女性につけられるのが一般的である。なお、接尾辞の *-ru* は、名詞のあとにつづいて形容詞化させたり副詞化させたりする働きももつ。

「知らない。訊いてみたこともない。なんに
したってこんな名前、もう時代遅れだよ。僕
に子どもができたら、やめにしたいね」と
やはり笑っていた。彼のルグバラの名前は
「Edema」といい、これは *ede* (=insult)⁸⁾ と
ma (=me) とに分けられる。彼は5人兄弟
の末っ子で、兄や姉の名前はそれぞれ「居
場所がない」「よそ者あつかい」「つれない
夫」「貧乏くじ」だ。当時、彼らの父母に何
があったのかについてはここでは割愛する
が、いずれにしても決して喜ばしい内容では
ない。この青年だけではなく、こうした「伝
統的」な名づけにたいする消極的な意見は、
ちらほらと聞かれた。若い世代が名づけにつ
いてどのような意識をもち、実際にどのよう
に子を名づけているのかは今後の調査のなか
で聞いていきたい。

ひょうひょうと

私は、現在のルグバラ社会で高名な年長者
から「Asianzu (平和)」というルグバラの名
前を頂いた。初対面のときに私は、たどたど
しいルグバラ語で、御年93歳になる彼に挨拶
をした。それを聞いて喜んだ彼は「あなた
にこの名をあげましょう」と、慣れた様子で
命名してくれた。ただ、その名づけは私に
とって、あまりに唐突であり形式的なものに
感じられた。まさかたった一度会っただけで

そんなにやすやすと名前をもらえるものなの
か。彼は「ルグバラ文化」にかんする式典が
催される際には必ず招かれるような人物で、
もともとは教師をしていた。わざわざ外国か
らやって来て彼と会いたがる「白人」は私
だけではないらしい。はじめ彼は、「Ayikoru
(幸福、歓喜)」と口にしたが、「あ、これは
ダメだった」と言い直して Asianzu を私にく
れた。Ayikoru という名前を彼がすでにほか
の人に授けていたということは、後日、彼と
再会したときに知ったのだった。

ルグバラの友人に何か名前をくれと頼まれ
れば、私はその人に「良い」名前をあげよう
とこだわっていた。また、自分自身について
は、たとえ「綺麗」で「良い」意味をもつ名
前でなくても、その名にまつわる「エピソード」
にちなんだ名前—よくもわるくもそこに
関わる人たちとの物語や出来事を思い出させ
てくれる名前—をつけてもらうことを、私は
どこかで求めていたことに気付いた。

名前の由来、とくにとんでもないいわれに
ついて話すときにルグバラの人びとは、それ
が自分自身や近い人の名前であっても、笑
いながら由来を語った。不幸を笑うなんてデ
リカシーがない、もし自分の名前が笑いもの
になどされたら恥ずかしい、と最初は感じた。
けれども、彼らは当事者をバカにしているの
ではなく、名前を、誰もが多少なりとも同じ

8) このときの会話で本人は *ede* を *insult* (動詞) と訳していた。ルグバラ語の辞書によると、*ede* は *belittle* (動詞) や *despise* (動詞) を意味する。*ma* は主格と目的格のほか、所有格を表すこともある。*ma* が主格の場合の語順は *ma ede* となるが、人の名前として *Maede* というのはほとんど聞かれない。本稿では、目的語をとる他動詞 *ede* のあとに代名詞 *ma* がきていると考える。なお、声調の違いによって *ede* という単語自体はほかに、*clean* (動詞) を意味する場合がある。ルグバラ語の声調は「高」、「低」、「中」と区別され、単語によっては「上昇」、「下降」の区別があるが [Barr 1965: 14]、本稿では声調符号を省略している。

ような体験をするのだと確認する媒体として用いているのかもしれないと思うと、見方は変わった。ともすると湿っぽくなりがちな話題を、災難にみまわれた人自身が「なんてことないさ」と笑ってのける、あるいは「笑ってなきややってらんない」といった具合にやりすごしているかのような彼らのユーモアともいえる感覚は、悪くないと思うのである。

引用文献

- Barr, L. I. 1965. *A Course in Lugbara*. Nairobi, Kampala, Dar es Salaam: East African Literature Bureau.
- Dalfovo, A. T. 1982. Lugbara Personal Names and Their Relation to Religion, *Anthropos: Revue Internationale D'ethnologie et de Linguistique* 77: 113-133.
- 梶 茂樹. 1985. 「テンボ族における個人名一言語人類学的考察」『季刊人類学』16(1): 47-88.
- 木村大治. 1996. 「ボンガンドにおける個人名」『アジア・アフリカ言語文化研究』52: 57-79.
- 小森淳子. 1999. 「ケレウェにおける個人名と忌避名」『スワヒリ & アフリカ研究』9: 21-43.
- Middleton, J. 1961. The Social Significance of Lugbara Personal Names, *The Uganda Journal* 25(1): 34-42.
- Sugawara, K. 2016. Personal Name as Mnemonic Device or Conversational Resource: An Ethnographic Study on the Naming Practice among the GÇ ui and GÇ ana San (Natural History of Communication among the Central Kalahari San), *African Study Monographs*, Supplemental Issue 52: 77-104.
- Uganda Bureau of Statistics (UBOS). 2014. *National Census Main Report*. Uganda Bureau of Statistics.
- United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR). 2016. *South Sudan Regional Refugee Response Plan*. United Nations High Commissioner for Refugees.

現代ヨルダンによる宗派・宗教間対話のイニシアティブ

池 端 蒨 子*

2016年8月、私は2年ぶりにヨルダンのクイーン・アリア国際空港に降り立った。空港の出口には、首都アンマンの中心部まで旅行者を運ぶタクシー運転手がわらわらと群がり、定価の数倍の値段をふっかけてくる。2年前に初めて訪れた際には押しの強い彼らに

翻弄されてしまったが、今回は彼らの波をうまくかわし、バスでアンマンへと向かった。

今回の調査では、21世紀以降ヨルダンが国家主導で推進する、宗派・宗教間の対話を模索する運動を対象とした。ヨルダンの正式名称は「ヨルダン・ハーシム王国」であ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科